401：602（天気報道；天気キャスター；国際協力）

’99国際気象フェスティバルに招かれて*

小　西　雅　子**

1．国際気象フェスティバルとは

1999年4月15日から18日までカナダのケベック市で開かれた国際気象フェスティバル（第1図）に招待され，初めて参加してきました．

このフェスティバルは，フランスの著名天気キャスターで気象学者でもあるフランソワ・ファンデゥ氏が創設したもので，今回で9回目．前回まではフランスで開かれていましたが，今回初めてフランス国外で開催されました．世界中を飛び回っていたファンデゥ氏が，訪問先の天気予報を楽しんで見ているうちに，天気予報にはお国柄や国民性，文化まで表れることに気がつき，それではと世界中の天気キャスターを一堂に集め，天気をとりまく文化や，アイデア，情報をわかちあうことを目的としてこのフェスティバルを創設したのです．

普通の気象関係の学会と違い，これは天気報道に携わるマスコミ（主にテレビ局）の集まりで，パーティも連日催され，あちこちでカメラ取材が繰り広げられて非常にきらびやかな雰囲気でした．回を重ねるごとに参加者が増え，今では天気キャスターのフェスティバルとしては，世界有数となりました．今回は世界63か国から126のテレビネットワークがコンペティションにエントリー（第1表）．80人あまりの天気キャスターが参加し，そのほか，気象学者，番組プロデューサーなどあわせておよそ200人が集まりました．

中世フランスの雰囲気を漂わす城塞都市，ケベック市は，人口約17万人，中心地は城砦に囲まれた旧市街で，30分もあれば全部歩いて見て回れるくらいの小さな歴史的な所ですが，そこに子供たちや一般のお客，われわれ外国マスコミ，さらにそれを取材にきた地元カナダのマスコミがつめかけて，人で溢れかえっていました．ケベック市長が，「ケベック市始まって以来最も多くのテレビ局を世界中から引き付けたイベント」と，絶賛したくらいでした．

第1図　フェスティバルのプログラムの表紙．

2．フェスティバルの内容

フェスティバルは，4日間の会期で，ケベック市内3か所の会場で開かれました．今回のテーマは，気候

* Participating in the Ninth International Weather Festival in Quebec City 1999.

** Masako Konishi，東京MXテレビ．

© 2000　日本気象学会

第1表 コンペティションへのエントリー数．このほか事務局の好意による飛び込み参加がかなりあり，最終的な参加数は本表の数値を相当上回ったと思われる．キャスターの参加総数は80人あまり．

地 域	参加国数	参加TV局数
北アメリカ	4	25
南アメリカ	3	3
ヨーロッパ	28	68
アフリカ	15	15
中東	7	7
アジア	5	6
オセアニア	1	2
計	63か国	126局

変動．専門家向けには，第2表に示すとおり，「地球温暖化に及ぼすCO_2とその他のガスについて」や，「天気とニュースメディア」などの講演，自由な討論の場のラウンドテーブルやワークショップが朝から夕方までびっしり行われました．

別の会場では，一般向けの講演が「ケベック市における異常気象と野鳥への影響について」などのテーマで9題催され，その他天気ショーなどのエンターテインメントも行われました．連日，小学校の子どもたちがバスで連れられてきて，トルネードを再現する実験を体験したり，地元テレビ局のコーナーでは，合成天気画面をバックに子どもたちが天気キャスターに扮しビデオを撮ってもらったりして歓声をあげていました．地元の人気キャスターが，天気図のかっこいい指差し方まで細かくアドバイスしてあげ，将来を担う子どもたちに天気の世界に興味を持ってもらおうという意気込みが感じられました．

専門家のための10題あった講演のなかで，最も私の印象に残ったのは，カナダ環境局のトップ気候学者，デービッド・フィリップス氏による近年の異常気象についての講演（第2表の講演6）です．氏はトルネードの多発や大洪水・大干ばつなどについての客観的事実を示し，「異常気象は，気候という単位で見ると“普通”であるが，地球が温暖化しているのはもう否定できない事実であり，その原因が人間活動によるものか，気候的変動かは特定できない．」と述べました．

氏はそのあと話題をガラッと変え，カナダ人の特徴について面白い話をしました．カナダの人の最大の関心事は天気だそうで，話のねたになるのはもちろんのこと，言い訳になったり，うわさやメロドラマのテー

第2表 専門家向け日程（Hangar du Vieux Port 会場）．

月/日	時間	内容
4/15	11：00	記者会見
	12：00	天気サロンオープニングセレモニー
	12：30	プレスカクテルパーティー
	14：00	講演1 WMOスイス ミシェル・ジャロー氏「気候変動は地球上ですでに測られるレベルか」
	15：30	講演2 カナダ環境局 ゴードン・マクビーン氏「カナダ環境局から」
	16：30	天気キャスタービデオクリップ採点会
	19：30	カナダ名物メイプルシロップ料理店にてディナーパーティー
4/16	8：30	別会場のスクールデイ訪問
	9：00	講演3 WMOスイス マイケル・コーフラン氏「エルニーニョとラニーニャ」
	10：00	講演4 カナダ環境局 ヘンリー・ヘンジュベルト氏「地球温暖化に及ぼすCO_2とその他のガスについて」
	11：00	講演5 カナダ環境局 ロバート・ベヌア氏「明日の環境予報」
	12：00	カナダ環境局のプレゼンテーション
	12：15	カナダ政府幹部 天気ショー訪問
	12：30	フランス料理店にてランチパーティー
	13：45	ケベック環境局のプレゼンテーション
	14：00	講演6 カナダ環境局 デービッド・フィリップス氏「異常気象—カナダと世界各国にて」
	15：00	天気キャスタービデオクリップ採点会
	19：30	シャトー・フロントナックホテルにて300人の大晩餐会
4/17	8：30	別会場訪問
	9：00	講演7 スウェーデン気象流体力学研究所 エーク・ヨハンセン氏「北大西洋振動について」
	10：00	講演8 メテオフランスTV ジャン・ピエールベイソン氏「天気とニュースメディアについて」
	10：30	ワークショップ 「国際協力の一例」 メテオフランスTVとサウジアラビアTV
	12：00	ランチカクテルパーティー カナダ気象大学生との交流会
	15：00	講演9 メテオメディアTVカナダ ピエール・ディオン氏「太陽と気候変動について」
	17：30	フリータイム
4/18	8：30	別会場訪問
	9：00	講演10 RTL TVIベルギー ルーク・トルレマン氏，RTBFベルギー デニス・コラード氏「気球世界一周・天気への千年紀のチャレンジ」
	10：30	ラウンドテーブル フランス気象学会ルネ・モリン氏主催，ケベック気象学会とアメリカ気象学会からの学者が参加しての自由討論と質疑応答
	12：00	クロージングカクテルパーティー
	14：00	フリータイム （ここで私は走り回ってカメラ取材した．）
	19：00	別会場へ移動してガラナイト ベスト天気キャスター表彰式（テレビ中継のなかで，発表の合間にシャンソン歌手3人のコンサートがある華やかな式）

マなど生活のあらゆる面で登場するとのこと．ほとんどの国民が，夜11時の天気予報を見てから寝，朝起きたらまず天気予報を見るそうです．

また，氏は経済活動と天気の関係についても言及しました．カナダでは天気は経済活動に大きな影響があり，「天気はそれぞれ値段をつけてやってくる．無料の天気はほとんどない．」とまで言われているそうです．たとえば，冬の高い燃料消費はもちろん，寒さ対策などのための衣料購入にも，世界中のどこの国民よりも多くお金をかけているし，スノーモービルや雪上車など雪対策の設備を最初に開発したのもカナダだとか．そういうわけで，カナダでは近年の異常気象に対する関心がいやがうえにも高いのです．

フィリップス氏は，異常気象が増えていると人々が感じるのには，マスコミにも大きな責任があると言います．正確な天気記録は近年わずか40年ほどしかないのに，マスコミは「過去の記録の中で最大の…」とか，「記憶している中では最悪の…」とかいった表現を多用します．

フィリップス氏自身が経験したことですが，暴風のときに，新聞記者が電話取材で，「この暴風は，過去最大ですか？『世紀の暴風』といってもいいですか？」としつこく聞くので，冗談に「誰がわかるでしょう？なんなら1000年で最大かもしれませんよ．」と答えたら，翌朝の新聞の一面にでかでかと，「カナダ環境局のトップ気候学者デービッド・フィリップス氏が，『千年紀の暴風』と呼んだ．」と載ったそうです．これは一例ですが，このようにマスコミが異常気象増加の印象を誘導しているのは事実で，これは，カナダでは「CNN効果」と呼ばれるそうです（CNNはアメリカの24時間ニュース専門テレビ局で世界中をカバーしている．）

実際には，昔は自分の住んでいる地域以外の異常気象は，耳にしなかっただけで，過去からあったものであり，それが今はテレビで暴風雨の被害などをリアルタイムで見られるため，まるで自分が体験したような気持ちになって異常気象がふえていると思ってしまう傾向にあるということです．

しかし，オゾンホールの出現がきっかけでオゾン層への関心が高まったように，最近はエルニーニョ現象の度重なる報道が気候の変動や異常気象へ人々の目を向けさせ，ひいては深刻な環境問題を考える機運をもりあげることになりました．現在は，今までになく世界中の人が天気に関心を持っています．

どういう天気が将来訪れるかわからない今日ですが，天気報道に携わる者にとっては，関心も高まってやりがいのある時代であることにはまちがいなく，熱心に聞き入っていた私たちキャスターは，国を越えて奮い立つ思いがしました．

今回指摘されて改めて気づいたことですが，気象の世界では，一般の人々に一番近いのは私たち天気キャスターです．環境問題は，一般の人々に広く知ってもらって生活改善を訴えねばならないものです．天気キャスターは，「明日の天気予報」を窓口に視聴者に環境問題へ関心を持ってもらうよう道をつけることのできる立場にあるのだということを感じました．

3．天気予報コンペティション

もちろん，このフェスティバルの一番の目玉は，世界中からエントリーした天気キャスター出演ビデオのコンペティションです．参加したキャスター全員ですべてのビデオを見て，パフォーマンス，科学的センス，CG技術などの項目で点数をつけていくのです．つまり，私も会期中に100以上の様々な国の天気予報を見たことになります．その印象はといえば，実にバラエティに富んでいました．ファンデゥ氏がこのイベントを創設しようと考えるにいたった気持ちがよくわかりました．

最後の日に，テレビ中継され各国の取材陣がひしめく中，シャンソン歌手を入れた華やかな表彰式が行われ，受賞者が発表されました．表彰は3部門に分かれ，気象と環境リポート部門で1つ，ラジオ部門で1つ，テレビ部門で7つの，合わせて9つの賞が贈られました．

テレビ部門にはグランプリの他に，最も科学的な予報ビデオに贈られる科学賞，天気キャスターからの点数が一番多かった人に贈られるキャスター賞などいろいろな賞がありました．印象的だったのは，まだ天気予報の歴史が浅い国のキャスターに贈られる賞で，今回はセネガルのキャスターが受賞しました．これは，もちろんCG技術もキャスターのしゃべりも，先進国に比べるととても地味なものでしたが，これからテレビの天気予報が根付いていくのを奨励する意味で贈られ，国を越えて天気予報を育てていこうというこのフェスティバルの精神がよく表れているものでした．

4．天気予報のお国振り

さて，国が違えば，視聴者が要求する天気予報も全く違うもの．その一部をご紹介しましょう．

たとえば，サウジアラビア．砂漠の国はいつも晴天なのにどうして天気予報が必要なのかと疑問を持つ私たちに，サウジのキャスターは「私の国では，雨の予報がとても大事だ．雨は神の贈り物だと考えられていて，人々は雨を待ち望んで，ピクニック（！）に出かけたりお祝いをしたりする．雨の日は，『行楽日和』なんだ．それに，雨水を使った特別料理もあるんだよ．」と話していました．

また，イタリアのキャスターは，軍服を着て出演していました．聞いたら，なんと現役の空軍の将校だとか．イタリアでは，軍の気象専門家がテレビのキャスターをつとめるケースが少なくないそうです．

フランスでは，夏や冬の長期予報が一番人々の関心を集めるということです．何せ，休暇5週間のお国柄ですから．

非常に話術にたけたアメリカの24時間ニュース専門テレビの気象キャスターは，パーティーでの世間話で，私の質問に対して，こんなことを言っていました．「うちの局は，世界中の天気予報をするわけだから，とても全部自分で解析なんかできない．そのために，うしろに気象マンがいて，ブリーフィングを受けるんだ．アジアはこう，ヨーロッパはこうってね．彼らは，テレビの天気報道の仕事が好きだけど，顔がよくなかったり（！）話がうまくなかったりで，画面に適さないから．」堂々と自信に満ちた発言で，日本人からは出ない発想だなと思った次第です．ちなみに，この方がキャスター全員からの点数が一番高く，キャスター賞を受賞しました．十分根拠のある（？）自信です．

私の提出したビデオは，節分の日に，日枝神社で催された力士の豆まきの映像を織り交ぜながら，私は着物（！）を着て，ひまわりの雲の映像を説明しているもので，人目はひいたようです．中国のキャスターが，春節のお祝いの映像をさしはさんで天気予報をしており，ヨーロッパのキャスターから，「日本と中国は同じ暦を使っているんだね．」という感想が出て，アジアの一員としての日本を感じさせられた一幕でした．

それにしても，第1表の通り，ヨーロッパやアメリカ，アフリカなどからのコンペ参加は多いのですが，アジアからは日本と他4か国だけ（キャスターが来たのは日本だけ）でした．主催がフランスなのでヨーロッパ中心だったり，アジアの国の政情などいろいろな事情はあると思いますが，もっとアジアの天気予報も見てみたいと思いました．

いずれにしても，CGを使った天気図や雲映像の技術などは世界各国大差なく，後は，その国民が天気予報に何を求めているかの違いと，天気キャスターの個人的魅力（知性，感性とも）が天気報道の質を決めているように感じられました．マスコミにおける天気報道はとにかく“人的資質”次第という感を強くしました．

第2図　表彰式後の記念撮影．前列中央の女性がキャスターコンペで優勝したフランスのキャスター．

5．日本の気象予報士制度について

日本の気象予報士制度にも関心が高く，様々な国のキャスターから説明を求められました．大学での気象学の学位を必要とはせず，一般に開かれた国家資格であるというのが，一番の驚きであったようです．欧米から参加している天気キャスターは，大学時代から専攻して目指したというケースが大半でした．

テレビでの天気キャスターの世界は，気象という学問の面と，「お天気お姉さん」という言葉に象徴される芸能の面と2つの顔があります．それはどこの国でも同じようで，参加していた天気キャスターも2種類にわかれていました．ただ，日本との大きな違いは，男性，女性関係なく2種類あるということのように思います．つまり，女性もキャリアをつんだ学問派も多く，男性も面白おかしく伝える芸能派もいるということです．

さて，私の場合は，局アナとしてお天気お姉さんから始まり，10年後「お姉さん」卒業とともに競争の激しいテレビ業界で生き残っていくためもあって，気象予報士の資格をとりこの世界に真剣に取り組みました．

この話は，思いのほか，他国の女性キャスターの関心を呼びました．最終的にキャスターコンペで優勝したのは，フランスのベテラン女性キャスター(第2図)でしたが，彼女は，なんと50代！どう見ても30代にしかみえない美しいフランスマダムです．フランスでも，やはりビジュアル系の天気キャスターがもてはやされることが多いとか．そのなかで，「地道に気象の専門家として予報をしてきた自分が評価されるのは，とても嬉しい．」と涙を流して喜んでいたのが印象的でした．

日本にもそういう日がくるでしょうか？

第3図　現地のカメラクルーを使って取材する筆者．

6．フェスティバルの雑感

この気象フェスティバル，主催者がフランス人とあって，何度も「人生は，ガストロノミー（美食学)」という言葉が出て，とにかく豪華なパーティ続き．毎日，お昼はカクテルパーティーか，カナダ名物レストラン．夜は夜で，元お城だったホテルで，フランスから著名なシェフを連れてきてのゴージャスな晩餐会．料理長がコック団を引き連れてオーケストラの伴奏をバックにシャンパンをささげ持って入場してくるというもので，ヨーロッパの社交界を彷彿とさせる世界でした．

また，日本と大きく違う点として，良く言えばフレキシブル，悪く言えばとてもルーズな事務局で，資料はもちろんのこと，毎日のスケジュールすらなかなかわからず，日本式の細部まで決められた大会運営に慣れている者には，驚きと戸惑いの連続でした．しかし，事務局のメンバー達は全員，参加者の顔を見るたびに，「Is everything all right?」と気遣い，あたかも家の主人が客をもてなすように細やかに動き回っていました．創始者のファンデュ氏自らも，講演の合間にコーヒーを参加者に入れて回ったりしていました．会期中に飛び入りで参加してきた天気キャスターのビデオをまた改めてみんなで見る時間を設けてコンペにエントリーさせてあげたり，融通をきかせて，くつろいだ雰囲気でした．

その根底に流れているものは，世界各国のキャスターや気象学者同士にファーストネームで呼び合う仲になってもらおうという精神で，おかげで私もいろいろな国のキャスターと仲良くなってきました．たった1人で現地のカメラクルーを使って取材しなければならなくなったり(第3図)，トランクの紛失など様々なトラブルに見舞われたりしましたが，それがかえって他国のキャスターや主催者と深くかかわることにもなりました．みんな実に親切で，5日後には，今後の友情を約束しあって別れを惜しむ私が居ました．

今はインターネットなどで，簡単に情報が飛び回りますが，やはり顔を見ての交流に勝るものはありません．地球規模で考えねばならない問題が山積している今日，視聴者に一番近いキャスター同士が，国を越えて親しく情報交換できる仲になっているのは意味のあることではと思った次第です．

私が深く反省した点もあります．パーティに着物で参加したのは日本女性として正解でしたが（行く前に神戸から母に来てもらって猛練習したのです！)，天気予報に着物で出演したのはまずかった．世界に向けてというと，ついフジヤマ，ゲイシャという発想になってしまい，安易でした．きちんと天気の世界の一個人として，今度は，情報の出し方と内容で勝負したいと思います．

7．最後に

グランプリを受賞したキャスターのプレゼンテーションは，寒冷前線の通過に伴う天気変化を，気圧の1時間ごとのグラフと，風向，風速のグラフを示して，「ここでボンと下がって変化しています．ここを境に急激に寒くなってきました．」というように4分間という短い天気予報のなかでもくわしく説明を試みていました．それを学問的に難解に解説するのではなく，目で見てわかりやすく伝えていました．また，多くの欧米のキャスターがそうでしたが，4分間の予報の間中，画面全体をCGだけにすることはなく，自分も画面に出たままで，身振り大きく体全体を使って説明していました．キャスターが画面に出たままだと，体に隠れて見えなくなる部分がありますが，それを逆に上手く使って見えている部分の説明を強調するのです．私の

反省として，日頃言い慣れた天気予報言葉を安易に使うことにより，視聴者に意味が届きにくくなることがあります．たとえば，「寒暖の差が大きいので体調維持に気をつけてください．」などとよく言ってしまいがちですが，これではおそらく子どもには理解もできず，一般視聴者にもさっと聞き流されることでしょう．そういう時，当日の気象資料を目でわかるように使い，服装から含めて画面の中の自分の存在そのものにも気を配って工夫をこらしていきたいものと強く思いました．

このフェスティバルに参加して，今までアナウンサーの世界から天気を担当していた自分を強く意識しました．気象の専門家でない自分に気象の世界に貢献できることはあるはずないと思いこんでいましたが，違う道があるかもしれません．

気象の世界で一般人に一番近い存在である天気キャスターこそ，一般人と気象専門家との橋渡しの役割を果たせそうです．人間活動が明らかに環境に悪影響を与えつつある今，異常気象の説明などをきっかけに，関心をもってもらえるよう手助けすることはできそうです．地球温暖化会議などが開かれ，国を越えて環境対策を考える時期に来ていますが，啓蒙のために天気キャスターの利用を考えるのもひとつの有効な手段かもしれません．天気には，国境はありませんから，現場の天気キャスター同士が親しくなっていることもそういう時に役に立つ日がくるかもしれませんね．

このフェスティバルは，いずれ日本での開催も考えられていると聞きましたが，日本で行われる時には，アジア各国の参加を促すことも課題のひとつかと思われます．

終わりに，気象学会の会員ではない畑違いの私に執筆の機会を与えようとご尽力いただいた「気象と普及委員会」の川端さん，また幾度も労を惜しまずアドバイスいただいた気象庁の永沢義嗣さんに心から感謝をささげたいと思います．気象の専門家からご覧になると放送世界から飛び込んだ私などは笑止千万なことを言っているかもしれませんが，お目にかかる機会があればご助言，ご指導いただけると幸いです．